

◇「平和への誓い」全文

子ども代表の「平和への誓い」全文は次の通り。人間は、美しいものをつくることができます。人々を助け、笑顔にすることができず。しかし、恐ろしいものをつくってしまつのも人間です。昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。原子爆弾の投下によって、街

は焼け、たくさんの命が奪われました。「助けて」と、泣き叫びながら倒れている子ども。「うちの息子はどこ」と、捜し続けるお父さんやお母さん。「骨をもいでください」と頼む人は、皮膚が垂れ下がし、腕の肉がない姿でした。広島は、赤と黒だけの世界になったのです。

73年がたち、私たちに残されたのは、血がべつとりついた少女のワンピース、焼けた壁に記された伝言。そして今もなお、遺骨のないお墓の前で静かに手を合わせる人。広島に残る遺品に思いを寄せ、今でも苦しみ続ける人々の話に耳を傾け、今、私たちは、強く平和を願います。平和とは、自然に笑顔になれ

ること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望をもてる未来があること。苦しみや憎しみを乗り越え、平和な未来をつくろうと懸命に生きてきた広島の人々。その平和への思いをつないでいく私たち。平和をつくることは、難しいことではありません。私たちは無力ではないので

平和への思いを折り鶴に込めて、世界の人々へ届けます。73年前の事実を、被爆者の思いを、私たちが学んで心に感じたことを、伝える伝承者になります。平成30年（2018年）8月6日 子ども代表 広島市立牛田小学校6年 新開美織 広島市立五日市東小学校6年 米広優陽

夏は、こども達に平和を伝える大事な季節です



つまずいたり、ころんだりしたおかげで物事を深く考えるようになりました。あやまちや、失敗を繰り返したおかげで少しずつだが人のやることを、暖かい眼で見られるようになりました。何回も追いつめられたおかげで人間としての、自分の弱さと、だらしなさをいやというほど知りました。だまされたり、裏切られたり、したおかげで馬鹿正直で、親切な人間の暖かさも知りました。そして身近な人の死に逢うたびに人のいのちのはかなさをいま、ここに生きていることの尊さを

骨身にしみて味わいました。人のいのちの尊さを骨身にしみて、味わったおかげで人のいのちを、ほんとうに大切にすることができました。一人のほんものの人間に巡り逢えたおかげでそれが縁となり次々に、沢山のよい人たちに巡り逢うことができました。だからわたしのまわりにいる人たちはみんなよい人ばかりです。

にんげんだものより
相田 みつを

えんちょう先生の
わくわくだより
NO. 13

H30.8.9

職員室に入ってきた年中組のH君、机の上に飾った花瓶の花を見て、「園長先生、お花さんきれいだね」 園長「これは、H君達年中さんが育ててくれた花だよ。ありがとね」・・・こんな言葉を交わした夏のひと時。

昭和20年、世界で初めて原子力爆弾が投下された広島と長崎の8月も、当たり前の日常がいつもと変わらずに流れている時間の一瞬の出来事でした。

広島での原爆投下による死没者の数は31万4千人を越し、長崎では17万9千人余りと言われています。何の罪も無い人達がかけがえの無い命を落とし、73年が過ぎた今も後遺症に苦しみ続けているという。余りにも長い月日が流れ、今のこども達には理解出来ない出来事だけれど、日本人である以上、決して繰り返さない、人事ではないと心に誓い平和への思いをこども達に引き継いでいかなくては・・・とつくづく思う事です。平成の時代も残り少なくなり、昭和は遠くになりつつあるけど、絶対風化させてはいけない昭和の惨事ですね。



8/9日の保育から・・・

プールに入る前のこども達は遊戯室に集まりました。今年も「ねこのはなし」(文 かわもと ふじえ 絵 うつのみやしんじ)の本をこども達に読み聞かせました。ねこがだいすきな女の子、ふじちゃんの小さい頃のお話です。戦争が激しくなった東京のこども達は、田舎に疎開、お父さんやお母さんと離れて暮らす淋しいふじちゃんでしたが疎開先のお寺にはかわいい「フタ」というネコがいて、ふじちゃんはとても可愛がっていました。所が、戦争が激しくなり、食べ物に事欠くようになると「ネコを没収」する日が来たのです・・・小さな薄い本でしたが、こども達は真剣な顔で見入っていました。

今日は、73年前の長崎に原子力爆弾が落とされた日です。小さい目の前にいるかわいいこども達に、もし今、そんな事がおこったらどうでしょう？

平和でないと、プールに入れない事、平和でないとお家の人となかよく暮らせない事、平和でないと美味しい物が食べられない事、平和でないと友達とこども園で楽しく遊べないこと等を話し聞かせ、平和を願う気持で11時2分に、皆で黙祷を行いました。